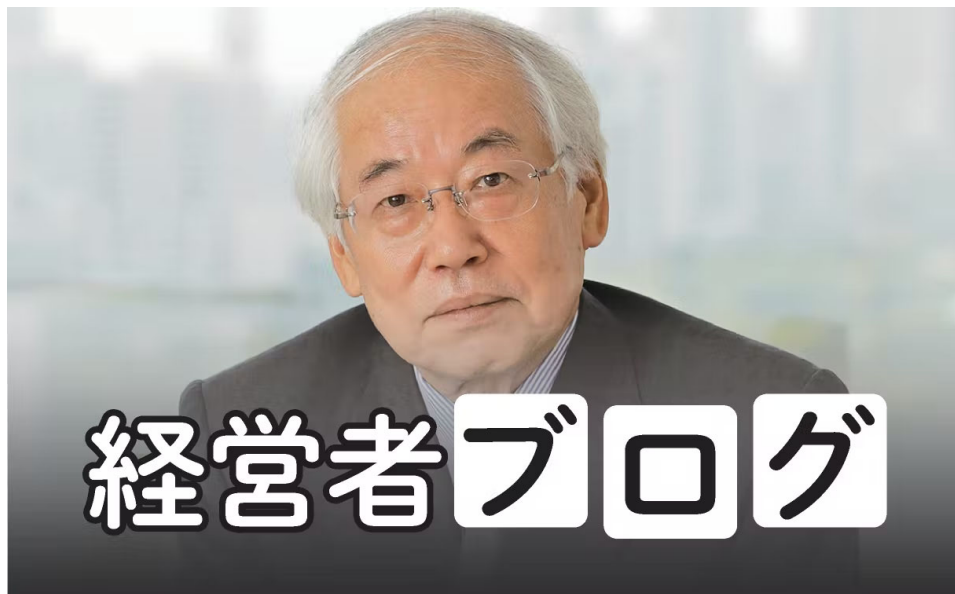


「豊かな時代」の緊急事態

経営者ブログ 鈴木幸一 IIJ会長

2021/4/27 2:00 | 日本経済新聞 電子版



日曜の夜、早々と、東京タワーやスカイツリーの明かりが消えている。先週、このコラムで、パンデミックによって東京に闇が戻り、星々がきらめく夜になるのだろうか書いた。ところが、なぜ東京タワーやスカイツリーまでも、その明かりを消しているのだろう。



スカイツリーの夜明け

緊急事態宣言が出たから。「自粛」を象徴することが、その意図なのだろうか。私には、ふに落ちない対策に思えるのだが。新型コロナのパンデミックが深刻な状況だからといって、文化や芸術など、人が生きる基盤をすべて封じてしまったら、いちばん大切な、人々の心が病んでしまうに違いない。

■パンデミック対応は最優先だが

もちろん、パンデミックに対する用心、対応は最優先にすべきだ。だが、パンデミックへの対応を優先するあまり、ほかのことを後回しにしてもよいものか、心配になる面もある。

無論、パンデミックに対し、周到的対策を最優先とすることに反対するわけではないのだが。人が健全な精神を保ち、生きていくことと、感染症対策をどのような形で実施していくかは、実に難しい話である。



さつき

まずは、人との接触を断ち切ることを優先しすぎると、別な形で深刻な状況が生まれるかもしれない。ふと、「この危機に、なにを言っているのか」と批判されそうなのだが、なにごとにやらず、異論があるのは当然である。

■ 海外演奏家とのコンサートはほぼ中止

先週の金曜日、リッカルド・ムーティさんとのコンサートを終えて、17年目にあたる「東京・春・音楽祭」が幕を閉じた。昨年に続き、新型コロナウイルスによって、予定されていた海外の演奏家とのコンサートはほとんどが中止となってしまった。

辛うじて、若い演奏家を育てようというムーティさんや私たちの熱意を具体化したアカデミーは実現した。また、ムーティさんを慕う、どちらかと言えば若い演奏家が集まった「東京春祭オーケストラ」による、イタリアの歌手たちと共演したヴェルディのオペラ「マクベス」と、モーツァルトの35番、41番の2つのシンフォニーの演奏会は、奇跡的とも言っていい日程で実現できた。

いずれも素晴らしい演奏で、スタンディングオベーションがいつまでも続いた。特に、モーツァルトについては、公演の予定日が一日でも遅い日程だったら、緊急事態宣言によって、演奏会が中止になっていたのではないかと。そう思うと、素晴らしいリハーサルを聴いていた私は、背筋が冷たくなる思いをした。



ビジョザクラ

「ムーティさん、演奏家の方々の強い熱意が、あれだけの演奏会を実現できた運を呼んだのかなあ。ま、鈴木さんもある意味で強運だからね。ともあれ、すごい演奏を聴かせてもらって、感謝しています」。演奏会が終わった深夜、こんなメールが友人、知人から送られてきた。

■人の運不運は避けられず

半生落魄已成翁（半生、落魄して已に翁となり） 独立書齋嘯晚風（一人書齋に立ちて晩風に嘯く） 筆底明珠無処売（筆底の明珠も売るに処無く） 間拋間擲野藤中（ひそかに放りひそかに投げうたん野藤の中に）

人には、どうしても運不運というのがあって、だれから、類まれな才能を認められながら、破滅的としか形容ができない人生を送った天才の悲劇については、多くの人物が浮かぶ。

上記の詩の作者である徐渭の人生は、まさに「凄絶な破滅」としか形容ができない。明時代末期の天才である徐渭は、書、画、詩、詞、戯曲、散文など、多岐にわたる作品を残した。上野の東京国立博物館でも、いくつかの書画を見ることができるのだが、破滅的な人生を送った天才の典型ともいえる。



フランスギク

わずかばかりその人生をたどると、生まれて100日目に父を失う。熱愛した妻は1児を生み、19歳で世を去る。神童とうたわれながら、郷試に、20年にわたり、8度も受験を続けたが、落第を続けた。ようやく地位を得て再婚するも、その5年後には精神を病んで妻を殺害してしまい、45歳から52歳までの7年間で獄中で送る。

■豊かな時代になったものの

その後、名声とは裏腹に、放浪と貧窮のうちに、書画を売って食いつないだようだが、筆底の明珠も野藤の中になげ打つと書いている。物質的には豊かな時代となった現在でも、世の中と合わず、自らの意志で、運を放擲してしまう人もいるのだが、時代が変わってしまったのか、その心情を吐露しても、心を打つことが少なくなったようだ。

「時代が変わって」と、簡単に片づけてしまったのだが、破滅的にしか生きられない天才の存在がなくなるわけでも、それぞれの人生の浮沈が消えるわけでもない。しかし、「豊かさ」という比較的、新しい概念に人が振り回され、溺れてしまうことで、悲惨という形容が少なくなったのかもしれない。

運が悪くとも、昔のような困窮に追い込まれることも少なくなっている。物質的には、昔なら貧窮とはいえない暮らしを送れるようになっている。もちろん、世界を見れば、深刻な事態に襲われている人が少なくないことは言うまでもないのだが。



シバザクラ

「今どき、飢え死にするわけでもないから、頑張るほかないよ」

IIJを創業して、2年ほど、インターネットのサービスの商用化が認められず、収入のない時代が続いた。私のささやかな預金通帳も、限りなくゼロに近くなった頃である。社員への月々の給与は、月末に茶封筒にお札を入れて渡すことになっていたのだが、まともに払えないことも多かった。

そんな時、「毎日の食事を、生卵と納豆、白米で暮らすとしたら月々の食費はいくらかかるか、計算をしてみた。今や、飢えとは無縁の時代なのだ」と冗談のつもりで、社員に説明すると、冗談として聞いてくれたはずの反応がなく、「今月は、どれくらいもらえるのですか」と、真面目な顔をして尋ねる社員がいて、かえって気づまりになったことがある。

本当に苦しい時に、余計な冗談を言うと、出口のない重い沈黙に支配されることがある。冗談をぶち壊した社員も、別に悪気があったわけでもなく、「お金はないけれど、今晚、飲みに行こう」と誘うと、安い居酒屋に腰を据え、わずかばかりの給与の遅配も忘れ、インターネットの未来について語り明かす、そんなことを繰り返していた。

【関連記事】

- ・ [パンデミックと環境破壊](#)
- ・ [技術の独り歩き、制御できず](#)

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.